

館長だより

山形県産業科学館

令和6年8月11日(日)

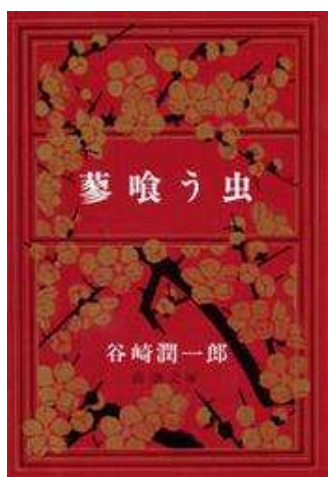
発行 館長 加藤智一

蓼食う虫も好き好き



「蓼食う虫も好き好き」とは、「人それぞれ、好んでいるものは違う。」「自分の好きなものが万人受けするわけではない。」「人の感性は大なり小なり違うものである。」と言った意味で使われる例えです。

「蓼」とは、辛くて苦い「柳蓼」という葉のことを指します。多くの虫が好まない辛くて苦い葉でも、好んで食べる虫がいるということから、「蓼食う虫も好き好き」というのは「好みは人それぞれ」という意味のたとえとして使われるようになったのでしょう。



文豪 谷崎潤一郎 の同名小説では、すっかり夫婦中が冷え切った要と美佐子の夫婦が登場。二人は、小学4年の子どもの前では取り繕っているが、美佐子は時間さえあれば夫公認の恋人のもとに通うありさま。ある日、義父から人形浄瑠璃の見物に誘われ、夫婦で出掛けてゆくが、要は以前に見た時とは異なり、

人形の動きに引き込まれてゆき、同席した義父の愛人、お久に惹かれていく。そして、要の従弟、高夏が上海から一時帰国し、要の家に来ると、要と美佐子はそれぞれ離婚について相談するが、高夏は春休み中の息子を連れて東京に行くことになり、要は義父とお久が淡路の人形浄瑠璃を見に行くというので、同行することに。ひなびた舞台も要には面白く、また自分たち夫婦に引き替え、義父・お久の関係がうらやましく思われた。三十三か所を巡礼するという義父たちと別れた要は、神戸に向かい、なじみの娼婦ルイズと会って……。と言うように、何とも子どもには理解できないドロドロの愛憎劇。

話をもとにもどしまして、科学の話をしてしましましょう。「蓼食う虫も好き好き」の蓼は、ヤナギタデのことを指すの



だそうです。茎や葉に苦みがある蓼を好んで食べる虫は「蓼虫(たでむし)」と呼ばれ、ヤツボシツツハムシなどの甲虫を指します。ヤナギタデは、霞城公園の土手とか馬見ヶ崎の河原を探すと結構簡単に見つかる？(最近散歩してないので不確かな情報)やつです。実はこれ、食用として人間も利用しており、辛みが強い葉は、香辛料として古くから使われてきました。赤色の「紅たで」、緑色の「青たで」は、川魚の刺身のツマに添えられることがあります。また、すり潰して酢に混ぜることでアユ等の魚の塩焼きに使用する蓼酢としても利用されています。

一方、蓼を食う虫とされている「ハムシ」とは、「羽虫」ではなくて「葉虫」です。ハムシ科の昆虫



は、幼虫が食草をモリモリ食べるだけでなく、成虫も後食することが知られています。一生の糧を蓼に依存しているので、好きも嫌いもないのですが、これぞ「本当の蓼食う虫」です。

ところまでは、ネット情報で確認できたこと。ところが、ここで私、気が付いたことがあります。「ヤナギタデにとまっているハムシの写真がない。」これっでもしかしたら、大発見になるかもしれない。ちびっこの諸君、霞城公園の土手でヤナギタデを見つけ出し、これを食べる虫を写真におさめてみよう。何種類見つけることができるかな。夏休みの自由研究にいかがでしょう。テーマ「蓼食う虫は本当にいるのか」、体力勝負だお父さん。以上。